

まちなみ通信(みのお)

発行：NPOみのお市民まちなみ会議 第41号 2010年11月

秋祭りを支える人々

みのお市民まちなみ会議 大町 凱彦

10月は箕面の各所で秋祭りが催された。本来は豊作に感謝する例祭で、10月23日に行われ学校も休みであった。しかし、最近では10月23日を中心とした休日に、各神社で催されている。今年も西小路の八幡太神社、牧落八幡大神宮、小野原春日神社、止々呂美神社、阿比多神社などで賑やかに行われた。小野原春日神社は2体の神輿が、若者に担がれて街を練り歩いた。

他の地域では太鼓台が多く、下止々呂美ではだんじりが出た。

箕面の祭りには、天狗が付きもので、止々呂美以外の各所で登場していた。我が国の天狗伝説の大半は、役行者に由来するもので、瀧安寺は役行者によって開かれたことから、箕面では



古くから祭りに天狗と獅子舞が、街中を練り歩いた。天狗には雌雄2組の面があるそうだが、見物の人々には殆ど見分けが付かない。

秋祭りは地域の連帯感の醸成と、町おこしの行事として、一時途絶えていたものも、それぞれの神社の氏子を中心に復活し、賑わっている。元々箕面の各集落には夫々鎮守社が在ったが、明治40年(1907)に、原則として一村一社に統合することが勧められ、各集落の祭神はすべて合祀された。その結果、為那都比古神社(石丸2)、阿比太神社(桜ヶ丘1)、春日神社(小野原西5)、素盞鳴神社(すさのお 粟生間谷)、止々呂美神社(上止々呂美)の5社となったが、第二次大戦後、この規制がなくなり、箕面地区、粟生地区



などでは、再度分祀して旧態に復している。しかし、何れにしても旧集落の氏神であったことから、住宅開発が進んで今日の姿になっても、旧集落を中心に祭りが催されている。

ところが、祭りは賑わい出したが、肝心の祭りを支える人々の多くが、高齢者となり神輿の担ぎ手、だんじりや太鼓台の引き手に支障が出てきた。

我が国では、少子高齢化が問題となって久しいが、箕面市でも同様の傾向が見られる。市勢年鑑によれば、箕面市の人口は第一表のようになって

いる。

第一表 箕面市の人口の推移

	平成14年 (構成比)	指数	平成17年 (構成比)	指数	平成21年 (構成比)	指数
総人口	121,250	100	124,663	102.8	125,350	103.4
年少層*	17,005 (14.0)	100	17,419 (14.0)	102.4	17,697 (14.1)	104.1
生産層*	86,546 (71.4)	100	86,771 (69.6)	100.3	82,708 (66.0)	95.6
高齢層*	17,699 (14.6)	100	20,473 (16.4)	115.7	24,945 (19.9)	140.9

*年少層：14歳以下 生産層：15歳以上64歳以下 高齢層：65歳以上

箕面市の市民の数は平成14年以来殆ど変わらず、人口増加も7年間で僅かに3.4%に過ぎない。14歳以下の年少層も殆ど数値が変わらず、国平均の動向とは異なる。しかし、多くの皆様は、この数値に首をかしげることでしょう。「家の近所では子供の数が非常に少なくなり、小学校のクラスも減っている」と思われる方がいる。一方で「近隣に住宅やマンションが建って、子供の数が増えている」と思われる方もおられます。どちらも間違っていないのです。箕面市は古くから住宅開発が進み、旧集落の周辺から、徐々に田畑が宅地化して、人口が増えて来ました。第二次大戦後住宅団地建設や、田畑の宅地化が一層顕著になりました。しかし、早くに住宅地となった所から、子供たちが成長し生産層に移行していきます。一方で小野原の再開発、止々呂美の森町、その他企業の社宅、社員寮の跡地などに新たな住宅が出来、子供の数も増えているのです。この為、年少層では、地域による差異があるのです。

15歳以上、64歳以下の生産層については、平成14、17年はあまり変化していませんが、平成21年になると、5%も減少しています。これは、年少層でも説明しましたが、新しい住民が増える一方で、一層高齢化が進んだことを示しています。昭和30、40年以降に、箕面に移って来た人々、旧くから箕面で商業や農業に勤しんで来られた人々も、高齢層に移行しており、その子供たちは成人となり、箕面を離れる人が多いことを示





しています。

ついで、65歳以上の高齢層については、平成14, 17, 21年と年を追って増加し、21年には人口の19.9%、つまり市民の5人に1人は高齢者となったことを示しています。我が国の平均より低いですが、増加率が21年に飛躍的に高くなっており、急速に高齢化が進んでいます。

さて、秋祭りの問題に戻しますと、先にも記したように、何処の神社も集落の鎮守

だけに、旧くからの住居が在った集落を中心に行われ、氏子の皆さんがお世話をされています。しかし、旧集落では高齢化が進み、神輿の担ぎ手、だんじりや太鼓台の引き手に支障が出ています。此の状況を数値で見てください。

第二表は、今年神輿やだんじり、太鼓台が出た秋祭りの中心的集落の生産層（15歳以上、64歳以下⇒働き盛り）の人口推移です。

第二表 箕面の秋祭りを支える生産層人口推移

	平成14年	17年	21年	指数	平成14年(構成比)	17年(〃)	21年(〃)	指数	
箕面市人口	121,250	124,663	125,350	103.4	生産 86,546(71.4)	86,771(69.6)	82,708(66.0)	95.6	
新稲	5	1,475	1,598	1,597	108.3	1,036(70.2)	1,054(66.0)	978(61.2)	94.4
	6	1,027	940	880	85.7	731(71.2)	658(70.0)	576(65.5)	78.8
桜ヶ丘	1	1,437	1,490	1,509	105.0	940(65.4)	956(64.2)	940(62.3)	100.0
	2	1,029	987	994	96.6	688(66.9)	629(63.7)	604(60.3)	87.8
	3	1,167	1,239	1,051	90.1	774(66.3)	813(65.6)	625(59.5)	80.7
桜	4	881	1,092	1,100	124.9	591(67.1)	731(66.9)	704(64.0)	119.1
牧落	1	1,197	1,210	1,222	102.1	860(71.8)	883(73.0)	859(70.3)	99.9
	2	1,057	1,062	1,037	98.1	716(67.7)	693(65.3)	646(62.3)	90.2
西小路	2	1,043	991	876	84.0	766(73.4)	703(70.9)	557(63.6)	72.7
	3	1,007	1,088	1,057	105.0	729(72.4)	767(70.5)	701(66.3)	96.2
小野原西	1	475	469	415	87.4	352(74.1)	354(75.5)	301(72.5)	85.5
	2	531	478	406	76.5	369(69.4)	314(65.7)	245(60.3)	66.4
小野原東	1	596	632	597	100.2	475(79.7)	499(79.0)	455(76.2)	95.8
	2	709	750	722	101.8	506(71.4)	548(73.1)	520(72.0)	102.8
下止々呂美		338	318	283	83.7	192(56.8)	179(56.3)	147(51.9)	76.6

*構成比: 各町の人口に占める生産層の人数比 *指数: 各町ごとに平成14年を100とする。

旧集落の住民数は、一部の町(新稲5, 桜ヶ丘1, 桜4, 西小路3)を除き、箕面市の平均(横ばい)に比べ、減少している。住民の増えた地域は、旧集落の周辺が住宅地となった所と推定される。旧集落の住民が減少している地域は、同時に生産層の人数も市平均

値より、減少している。また、牧落 2, 小野原西 1, 小野原東 1, 2を除き生産層の構成比も小さくなっている。

これらの町の生産層の人数減少を、さらに分析すると年少層（14才以下）は、住民が増加した町では増加し、年少層の構成比も高い。つまり住民の増えた町は、比較的



若い子供連れの家族が新たに加わったことが伺われる。しかし、住民が減少している町では、年少層の構成比も低下している。これは、古くから住んで居られる方々が年齢を重ね、高齢層に移行し、同時に子供達

も成長して生産層に移行したが、多くは成人して町から転出したと考えられる。

一方、これらの町の高齢層は、住民の増えた町でも高齢者が増えている。桜ヶ丘 2, 3, 牧落 2, 西小路 2, 小野原西 2, 下止々呂美では、人数の増加割合より高齢者の構成比の上昇が顕著であり、住民の減少より、高齢化が進んでいることを示しています。

説明したように、神社の在る旧集落では、一部を除き住民が減少し、秋祭りを支えて来た人々も、高齢化が他の地域より進んでいる。しかし、各神社の関係者は知恵を出し合って、祭りの盛り上げを図っておられます。例えば旧集落の枠を越えて、地域を拡大し、新しい住民にも参加を促している。その仕掛けの一つに、従来祭りの見物者、接待や料理などの裏方だった、子供や主婦を積極的に参加させ、子供に太鼓を打たせたり、女太鼓台を出したりしている。

下止々呂美では、だんじりの引手に、子供や主婦も総動員して、地域全体の祭りの意識を高め、皆んなで楽しむ工夫をこらしていた。また、祭りのムードを高める為に、祭りが近づくくと街角に幟旗を掲げ盛り上げていた。

祭りに人々が集



まり、賑わえば神社の境内に沢山の店が並び、子供たちが家族に手を引かれて、綿菓子を舐めたり、若者がゲームを楽しみ、焼きそばなどを食べていた。昔ながらの素朴な秋祭り（村祭り）が実現していた。

しかし、祭りには多大の費用も掛かり、人集めや金集め、祭礼に伴う諸準備（神輿や太鼓台などの巡行、沿道の交通整理など）を町の人々が早くから裏方として、支えて来られた。幸いにして高齢者と云っても、昨今は 80 才位までは、かくしゃくとしておられ、神輿を担ぐなどの力仕事は不向きでも、経験と頭脳、祭りを盛り上げようとの意気込みだけは盛んである。今年も阿比多神社の世話役として活躍された、まちなみ会議のメンバー（70才台後半）が、目を輝かせて「祭りは参加してこそ面白い」と語っておられたことに象徴されています。

一方で小野原春日神社の大きな神輿は、担ぎ手が若い？男性でなければならず。担ぎ手の確保に一層頭を痛める事でしょう。地域を拡大し、新しい住民を参加させたり、近くの大学生（地域のマンションに意外に多く住んでいる）などに呼び掛けるなど、工夫して頂き、伝統の祭りが永く続くことを願っています。



箕面の景観に関心をもつ、私達みのお市民まちなみ会議は、伝統ある秋祭りも、地域を代表する景観の一つと考えます。しかし、取り上げた旧集落が、総じて高齢化が進んでいることに、大いに注目しています。それは、旧集落に古くからある村落の佇まいを色濃く残している箕面の優れた景観の一つとなっているからです。瓦葺きの和風建築、虫籠窓の残る中二階、門冠り松の似合う家、長屋門など、近代の建築に見られない、故郷を感じさせる懐かしい家並みが、旧集落の核となっています。しかし、現代は各戸に車を持ち、生活習慣も大きく変化し、新しい家が次々に建っています。

此の旧集落の住民数の動向……高齢化、世代交代。これは旧集落の佇まいの維持に深く係わってきます。つまり、旧集落（秋祭りが行われなくとも）の街並みを保持することの是非が、近々問われると考えます。箕面市の人口動態については、別の機会に記しますが、今回は市全体よりも、高齢化が進んでいる旧集落の街並みの将来を、皆んなで考えるきっかけになればと思います。

みのおの少し変わっている石垣 Part 1

高岡 公昭

街の石垣を見て廻っているうちに、少し変わった石垣を見つけた。

石材は外国産で、恐らくスウェーデン御影と呼ばれる赤褐色の花崗岩らしく、大きな原石で輸入され、国内で石材に加工（ビル等の建築材）した残り、即ち最外側の部分、採石の際のビット穿孔跡の付いたりしている部分、もう石材として使用出来ない部分、例えて云うなれば食パンでサンドイッチを作った際、切落とした耳の部分、ラスクに再加工される部分を、石垣として利用したのではないかと考えられるものである。

面積は大きいが、厚みは極めて少ないと思われ、ビット跡が歴然として残っている材料で、これらを並べて張付け石垣としたもので、他所では余り見られない珍しいものではないだろうか。

桜ヶ丘 3丁目と半町 1丁目の境界の住宅街で見られるものである。



赤褐色の石垣

表面にビット穿孔跡が残る

